
革命キス

sadaka

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

革命キス

【Nコード】

N8870L

【作者名】

sadaka

【あらすじ】

中学生の頃までに一通りの悪事を経験したオレは日常に何の楽しみも見出せないまま、つまらない人生を送っていた。高校二年の夏、そんなオレに担任である瀬川はこう言った。世界は美しい、と。

放課後の屋上に出てみると、そこには先客の姿があった。入道雲が浮かんでる夏の空に屋上から立ち上る白い煙が吸い込まれるように消えていく。それは一般的には悪いことだとされている行為だけど、オレは別に何も思わなかった。

「よお、高野」

「お前も吸う？」

校内でも評判の悪ぶってる連中がオレを認めて声をかけてきた。差し出されたのは連中が吸ってる、マイセンの箱だ。校内で隠れてタバコを吸うスリルを楽しんでた時期もあったけど、今は別にいない。飽きたんだ。

「何してんの？」

日陰の冷えたコンクリートに座り込んでる連中がトランプを片手にしてたので訊いてみた。返ってきたのは『ババ抜き』という返事ももちろん、ただのババ抜きじゃない。

「見ろよ。今日は一万五千も勝ったんだぜ」

頭を金に染めてるヤツが、剥き出しのまま無造作に置かれてる現金を指して笑った。いつからババ抜きやってたんだか知らないけど、ずいぶん儲けたな。一勝負にいくら賭けてるんだか。

不意に、オレの背後でボタンという音がした。振り返って見ると屋上の扉が開いていて、出入口を封鎖するように数人が佇んでいる。逆光になってたから出入口にいる人物の顔は見えなかったけど、生徒が来たにしては様子がおかしいな。と思っていたら、屋上に現れたのは教師たちだった。

「お前ら！！」

屋上には、オレたちの他は誰もいない。ということは、教師の怒声はオレたちに向けられたものということだ。だけどオレも、他の奴らも、こういった場面には慣れすぎている。取り乱したりするや

ツは一人もいなかった。

「学校で煙草なんか吸っていいと思ってんのか!？」

教師の言葉に従ったのかどうかは定かじゃないが、床に座り込んで煙草を吸ってた連中は足元のコンクリートで火を消すと吸殻を投げ捨てた。これみよがしな行動が怒りを買ったらしく、ガタイのいい体育教師がすごい形相でオレ達に近付いてくる。最初に突っ込んで来た教師に続けとばかりに、他の教師達も後からやって来た。体育会系の教師が素行の悪い生徒を拘束して連れ去り、文系や理系の教師は証拠品である吸殻やトランプ、生の現金なんかを回収して屋上を去って行く。オレも連行されるかと思ったけど、取り残された。ただ、屋上に残ったのはオレだけじゃなかったけど。

「高野もやったのか？」

真剣な面持ちで話しかけてきたのはイケメンだと女子に騒がれてるうちのクラスの担任、瀬川だった。やったのかと言われてもな悪事が重なってるから、どっちのことを言ってるのか分からない。とりあえず、両方答えておくか。

「タバコだったら吸ってないですよ。制服には副流煙のにおいがついてるかもしれないけど、タバコの箱もライターも持ってないです。賭けトランプのことだったら、同じくやってません。オレ、サイフ持ってないですから。疑うんだったら身体検査してもいいですよ」

質問に答えてやると瀬川は呆れた顔をした。オレが瀬川の立場だったら、やっぱり同じように呆れてるかもしれない。言い訳慣れしてるもんな、オレ。でも今日はどっちもやってないから、言い訳じゃない。

「冷めてるな」

そう言っただけで瀬川は、オレの担任になった時からそう思っていたのだと明かした。瀬川に限らず、オレはよく他人に冷めてると言われる。まあ実際、クラスメイトとかと比べればオレは冷めてるんだろ。その自覚はあるが、別に瀬川と話し込む内容じゃな

い。オレはもう校舎の方へ行こうと思ったんだけど、隣に並んだ瀬川が話を続けたがった。

「学校は退屈か？」

「退屈ってほどじゃないけど、楽しくはないですね」

「そうか。それなら、高野はどんな時に楽しいと思うんだ？」

瀬川に問われて、考えた。だけど最近、楽しいって思ったことないな。だから答えられなかった。オレが無言でいると、瀬川は驚いたように目を見開く。

「ないのか？ 何も？」

「ないですね」

正確に言えば、ないんじゃないかって飽きたんだ。だけど、そんな深いことまで瀬川に話す義理がないから黙ってた。突っ込まれると面倒だしな。

「……高野、来週の日曜は暇か？」

何かを考えていたかのような間を空けた後、瀬川はそんなことを言い出した。予定はないけど嫌な予感がしたから、オレは反射的に首を振る。

「課外授業なら行きませんよ」

瀬川は二ヶ月に一度くらいの割合で課外授業をやる。二年に進級して瀬川のクラスになってからはまだお目にかかってないけど、そんな話がオレの耳にも入るくらい彼の授業は評判がいいんだ。まあ実際、瀬川が教えてる現国は解りやすいし、独自の解釈を交えての授業は面白いと感じる時もある。だけど休日まで学校の連中と一緒にいるのは、だるい。

やっぱり課外授業の誘いだったらしく、瀬川は目を白黒させてる。無気力な生徒が課外授業を通して少しでも学校に楽しみを見出してくれば万々歳……と、瀬川が考えていたかどうかは定かじゃないけど今の瀬川の顔を見るに、それに近いことは考えていたんじゃないかと思う。そういうの、暑苦しいよ。

「先生は教育熱心なんですね。そういう熱意はオレじゃなくて、別

の誰かに向けてやっってください」

特に女子なら、手放して喜ぶことだろう。その一言は言わなかったけど瀬川と話すのも飽きてきたので、オレは踵を返して屋上を後にした。

あの屋上での騒動があった後、タバコを吸ってた連中は親呼び出しをくらった拳句に全員退学処分となった。まあ親を呼び出されても気にも留めない連中だったから、高校を退学になったところで屁とも思わないんだろうが。学校側は問題児がいなくなったと喜んでみるみたいだった。オレは……別に、何も思わなかった。

屋上での出来事からタバコを吸ってた連中が退学になるまで、ちょうど夏休み前に起こった出来事だった。今はもう夏休みに入っていて、オレは部活にも入ってないから休み明けまで学校へ行くことはない。安穩とした退屈な時間、それがオレにとっての夏休みだ。だけど今年は少し勝手が違うらしい。自宅の玄関を開けた途端目に入った担任教師の顔に、オレはそんな予感を抱いた。

「……何ですか？」

「家庭訪問に来た」

学校と同じくスーツ姿の瀬川は笑顔で言っただけ、高校って家庭訪問があるのか？ 一年の時は、確かなかったような気がする。それにこういうことって事前に知らされてないとおかしいだろう。

「母は留守です」

瀬川がいきなり来るから、本当に母親は不在だ。ということ、オレは瀬川を上げることなく玄関を閉めた。だけど瀬川は諦めなくて、しつこいくらいにインターホンを鳴らし続ける。それが教師の行動か？

苛立ちながら再び玄関を開けると、やっぱり瀬川はまだそこにいた。出てきたオレを見て観念したと思ったのか、瀬川は勝手に上がりこんでくる。またインターホンを連打されてもたまらないから、オレも仕方なく瀬川を受け入れた。

母親がいないから、オレが瀬川にお茶を淹れてやる。夏真っ盛り

だけど熱いお茶にしてやった。だけど瀬川はオレのささやかな抵抗を受け流して「ありがとう」とか言っている。どうやら嫌がらせが足りなかったらしい。凍らせた麦茶とか、すぐには飲めないものを出してやれば良かったか。

「母は留守です」

飲んだらさつさと帰れという意味を含ませて、オレは同じ科白を繰り返した。だけど瀬川には、オレが暗に伝えたかったことが伝わらなかったらしい。「さつきも聞いた」とか言って笑ってやがる。まさか母親が帰って来るまで居座る気じゃないだろうな。

「いったい何の用なんですか？ 家庭訪問っていうのは嘘でしょう？」

「嘘じゃない。夏休みでも高野が健全な生活をしているか様子を見に来たんだ」

瀬川の言い草に呆れてしまった。健全な生活って何だ？ 休みだからってオレが夜遊びでもしてると思ってたのか？ それに今時、夜遊びなんて小学生でもやってる。

「見ての通り、フツウにしていますよ。だから帰ってください」

「長居はしない。だが顔を見ただけでは生活の様子が分からないからな。少し話を聞かせてくれ」

長居をしないと言うわりに、瀬川はスーツの上着を脱いで自分の脇に置いた。オレに何を語らせたいのか知らないけど、うざいな。こんなことになるならあの時、余計な話をしなきゃ良かった。

「……話って、何を話すんですか？」

「そうだな、休みに入ってから何をしていたのか聞かせてくれ」

「何って……別に。フツウにしていただけですけど」

「高野の『普通』を聞かせてくれればいい」

瀬川は簡単なことのように言うけど、フツウを説明するのが一番難しい。国語の教師なんだからそのくらい解っていて欲しいよ。日本語が難しいの、あんたの方が良く知ってるはずだろ。

「朝起きて、夜寝ます」

いちいち説明するのが面倒だったので、極論で答えた。オレとしては早く愛想を尽かして欲しかったのに、瀬川は思いのほか真面目に応じてくる。

「それは、健全だな」

「……もういいです」

そこまでまともに受け答えされると抵抗してるのがバカらしくなってくる。早く瀬川を追い返したくて、オレは夏休みに入ってからの日々をかいつまんで教えてやった。

「勉強して、友達と遊んで、一人で買い物に行った、と。その中に楽しいと思えることはなかったのか？」

ああ……やっぱり、その話なんだな。だけど残念ながら、楽しいと思えたことはない。勉強は義務だからやってるだけであって楽しいなんて感じないし、どこかへ出かけるにしても行き飽きた場所ばかりで面白味がない。大抵の『遊び』は、昔やったからな。今はよっぽど新鮮なことでもない、楽しむことが出来なくなってしまったんだ。

「先生は生きてて楽しいですか？」

オレが『生きてて』とか言ったからなのか、瀬川は急に深刻そうな顔になった。でもきつと瀬川が思うほど、オレの言葉は重くない大人って何を楽しみに生きてるのか、ちょっと聞いてみたくなっただけだから。

「高野は人生がつまらないと思ってるのか？」

瀬川から返ってきたのは答えじゃなくて質問だった。答えにくい質問をされた時、よく使う手だよな。そうやって自分のことは語らないで他人の胸の内だけ暴こうとする、瀬川も面白味のない大人なのか。まあ、最初から期待なんかしてないからどうでもいいけど。

「楽しいことがまったくないとは言い切れないですけど、つまらなさそうですね。まあそれも確実な未来ではないですし、考えたところで変わることもないだろう将来を話し合うのって時間の無駄だと思いませんか？」

しかもオレの未来は瀬川にはまったく関係のないことだ。それはオレだけが考えればいいことであって、瀬川に介入されるいわれもない。言わなきゃ永遠に気付いてもらえなさそうだったから、オレははつきり「迷惑だ」と告げた。

「教育熱心なのは悪いことじゃない。だけどそれは、オレには必要ありません。前にも言いましたよね？」

これだけ言えば、さすがに解ってもらえただろう。小さく首を振って嘆息した瀬川を見て、オレはそう思った。だけど瀬川はその後、真面目な顔をして真っ直ぐにオレを見据えてくる。

「高野、君にはどうやら特別指導が必要なようだ」

「……はい？」

瀬川が突拍子もないことを言い出したから、大袈裟じゃなく愕然とした。あれだけストレートに言って、まだ解ってもらえないのか。しかも特別指導って何だ。

「先生は夏休みでも休みじゃないから、指導は日曜に行く。来週から始めるから、そのつもりでいるように」

勝手なことを言い放ちながら瀬川は帰り支度を始めている。このままじゃ本当に胡散臭い特別指導とやらに付き合わされる羽目になってしまう。それだけは避けたかったので、オレは似非優等生ぶるのをやめることにした。

「勝手に決めてんじゃねえよ」

久々にドスを利かせた低い声を出し、立ち上がってソファに座ってる瀬川の傍へ寄る。その流れで、オレはソファの背もたれ部分を足蹴にした。当てないようにはしたけど、意外と瀬川に近い場所を蹴ったな。腰を浮かしかけてた瀬川はソファに座りなおして、オレを見上げてくる。ダメ押しで、もう少し脅かしとくか。

「お前、うざいよ。もう俺に関わんな」

爽やか正統派ですって感じの瀬川にならこれで十分だと思ったんだけど、オレを見上げてきている瀬川の瞳には変化がない。何かが変だと思った刹那、瀬川が立ち上がりざまにオレの足をすくい上げ

る。浮かした状態の足をさらに持ち上げられたもんだからバランスを崩して、オレは背中から床に倒れた。

……いてえ。でもそれ以上に驚きで、天井を見つめながら瞬きを繰り返すことしか出来なかった。今、何が起きた？

「親に養ってもらってる分際で調子こいてんじゃねーぞ、ガキが」

オレの視界に入ってきた端正な顔が、無表情のままに毒を吐く。

その顔の作りは見慣れた担任教師のものだけど……誰だ、お前。大丈夫か、高野？」

オレを転倒させた張本人に助け起こされながら、オレはまだ混乱していた。しゃがみこんで視線を合わせながら心配そうな顔をしているのは、オレの担任である瀬川。じゃあ、さっき、冷徹な無表情でオレを見下ろしていたのは……？

「来週のことだが、待ち合わせは盛り街駅にしよう。時間は十八時。遅れないように」

いつもの爽やかスマイルを浮かべ、瀬川は自分の言いたいことだけ言って立ち上がる。そのまま呆けているオレを残し、二セの家庭訪問を終えた瀬川は何事もなかったかのように去って行った。

高校二年の春、進級すると同時にクラス替えがあつて、担任の教師も一年の時とは別のヤツになつた。現在の担任の名は瀬川。担当している教科は現国。まだ二十六歳と若く、爽やか系のイケメンだから女子に圧倒的な人気を誇っている。生徒に対してフレンドリーなタイプではないが面倒見がいたため、男子の評判も悪くはなかった。そんな瀬川は、いわゆる理想の教師つてやつなのだろう。典型的な『先生』なのだと、オレも思っていた。あの、二セの家庭訪問の時までは。

まさか、瀬川にも裏の顔があつたなんてな。そんなことを考えながら、オレは待ち合わせ場所である盛り街駅に降り立った。オレの家からだ和小一時間くらいかかるこの駅の周辺は、いわゆる繁華街だ。飲み屋とかカラオケとかゲーセンとか、そういったものが密集してる。そんな場所に生徒を呼び出して、どんな特別指導をしてくれるって言うんだか。しかも瀬川が指定してきた時刻は午後六時。到底、教育的指導が行われるとは思えない。しかしだからこそ、オレは呼び出しに応じたのだ。オレの家で瀬川が一瞬だけ見せた、教師じゃない別の顔。あれが瀬川の本性なのか確かめてみたくなつた。裏の顔を持つ教師なんてちょっと面白いじゃん。そんなヤツがどんな顔してオレを諭すのか、見てみたい。くだらない茶番には違いがないが退屈しのぎくらいにはなるだろう。

駅の改札を出て、オレはそのまま券売機の横に移動した。さて、問題はここからだな。盛り街駅は東西南北に出口があるんだが、瀬川は出口の指定まではしなかった。オレのケータイ番号も知らないくせに、どうやって待ち合わせするつもりなんだか。それが最初の見所だな。遅れるなつて言つたのは瀬川の方だから、十分待つて音沙汰なかったら帰ろう。

オレが駅に着いたのは五時五十分だった。六時十分までは待つ

もりでいたんだけど、六時ぴったりにオレの肩を叩く者がいた。振り向いて目にしたのは、チャラい格好をした男。あまりにも普段と印象が違うからとっさには分からなかったが、よくよく顔を見てみれば瀬川以外の何者でもなかった。改札の方から来たみたいだけど、この人混みでよくオレを発見出来たもんだ。

「来たな」

普段は無造作な感じに整えている短い黒髪をワックスで十分に遊ばせている瀬川は、オレの顔を見るなり勝ち誇ったような笑みを浮かべた。あんたが来いって言うから来たのに、ずいぶん言い草だな。ちよつとムカついたので、瀬川のことを頭から足下まで不躰に眺め回してやった。教壇に立っている時の瀬川は清潔感のある背広姿だが、今日の瀬川は全身をブランド物で固めている。裾を出して着こなしてるシャツはわざわざ第二ボタンまで開けられていて、はつきり言ってみつともない。さすがにピアスはしていなかったが指輪やネックレスなんかのアクセサリーは身につけているのでケバケバしい。今のこいつを見て、誰が教師だと思うだろう。

「……帰っていい？ オレ、いい歳してそんな格好してる人と歩きたくない」

「そついう高野はずいぶんと、高校生らしい格好をしているな」

繁華街で待ち合わせなんだからもう少し大人に見える装いをしてきてもらいたかったと、瀬川は勝手なことを言う。服装の指定なんてされてなかったから、オレはフツウにシャツとジーンズで来た。何で担任と会うのに気合入れなきゃいけないんだよ。言われてもないのに身だしなみを整えてくる方が理解不能だろ。

「その格好じゃ身分証の提示を求められるな。まずは着替えか」

さっきオレがやったみたいに、今度は瀬川がオレを不躰に眺める。しかし身分証の提示って、一体どこへ連れて行くつもりなんだか。まあ、こんな場所で待ち合わせをしてる時点でフツウの指導なんて期待してなかったけど。

「来い。服くらい買つてやる」

オレの意思なんかおかまいなしに、瀬川は雑踏に向かって歩き出す。ここまで出て来て何もしないのも電車賃の無駄だから、とりあえず着いて行くことにした。オレが帰らないことを見透かしていたように、瀬川はいやらしい笑みを浮かべて歩調を緩める。何でそう、いちいち上から目線なんだよ。気に食わないな。

「センサー、一人の生徒にだけ服とか買ってやるのはエコヒイキって言うんじゃないですかあ？」

「なんだ、いらないのか？」

「くれるならもらいますけど。そういうのって問題あるんじゃないの？」

「受け取った時点で高野も収賄罪だ。気にするな」

瀬川はサラツと言つてのけたけど、教師の贈賄の方がヤバイだろう。だけど瀬川が、そんなことも解らないほどバカな大人とも思えない。ということは、オレが絶対に口外しないと自信を持って言えるつてところか。その根拠のない自信はどこから来るんだ？ オレのこと、よく知りもしないくせに。

「どんな指導してくれんの？ つまんなかったらすぐ帰るよ？」

オレがそう尋ねると、瀬川は大人の楽しみを教えると云つた。大人の楽しみ、ねえ。あんまり興味をそそられないが、まあ、お手並み拝見といくか。

メンズのブランドが入ってる、全体的にちよつと値段が高めのデパートで瀬川に着替えを買ってもらい、それからオレたちは飲み屋が立ち並んでいる一画に移動した。瀬川が向かったのはチェーン店系の安い居酒屋じゃなくて、これまた値段の高そうな洒落た感じの店だった。オレたちが通された個室には先客の姿があつて、瀬川と同年代くらいの男女がいる。オレと瀬川を含めると男女の割合は四対四。しかもこの、初対面の空気が漂う独特な雰囲気は間違いない合コンだな。

オレが直感した通り、男と女が寄り集まつての酒の席は合コン以外の何物でもなかった。だけどオレが今まで経験してきた合コンとは違って、瀬川と同年代くらいだと女も落ち着いてる。盛り上がることを最優先する十代の合コンとは確かに違うかもしれないが、これが瀬川の言う『大人の楽しみ』ってやつなのか？ だとしたら、興醒めだ。

一軒目の雰囲気はまだ良かったんだけど、二軒目でカラオケに移動してからが最悪だった。その頃にはすっかり酔いが回っていて、一軒目の落ち着いた空気がものの見事に払拭されてしまったからだ。こういう時の弾け方って年齢に関係ないんだな。この特別指導とやらで、そのことがよく解つたよ。

「王様ゲームっ！！」

酔っ払った男がマイクを独占して、歌うでもなくわめきたてている。ついに王道ゲームが始まったか。見飽きすぎていて、ため息も出ない。

「君はやらないの？」

すみっこに陣取って盛り上がってる連中を眺めてたら、女に声をかけられた。ショートボブのこの子、何て名前だったかな。自己紹介も聞き流してたから忘れた。

「やらない。飽きたから」

別に王様ゲームが嫌いなわけじゃない。一時期毎晩のようにやってたから飽きたただけだ。やり始めの頃は初対面の女の子とキスしたりするのが楽しかったけど、今はそれに楽しみを見出せないんだよ。「ふーん。君が一番若そうなのに冷めてるんだね」

オレと会話をしつつも、女の視線は別のヤツに向けられている。彼女が見つめている先には長い脚を横柄に組んで何故かポツキークわえてるチャライ男の姿があった。オレの他にもあと二人男がいるけど、今日の主役は間違いなく王様のアイツだ。さりげなく全員にアイソを振りまいている女達の熱視線は、実はヤツにだけ向けられているから。

「ねえねえ、瀬川さんが医者だってホント？」

オレの耳元に唇を寄せながら、女が密かな囁きを零す。どこからそんな話が出てきたんだか知らないけど『センサー』違いだ。でも、なるほどな。それで彼女達はみんな瀬川狙いなのか。世の中しよせん金ってことだな。

女と二人で一本のポツキークを両端から食べ進めている瀬川の姿を尻目に、オレは席を立った。タダ飯も食ったことだし、そろそろ帰ろう。こんなつまらない『指導』を受けるくらいなら家で寝てた方がマシだ。というわけで、盛り上がってる連中の目に留まらないよう密かに個室を後にする。カラオケ店の中では廊下でも流行の音楽が流れていて、あちこちから素人の歌声も漏れ聞こえてくる。それを流し聞きながら受付を素通りしてエレベーターが来るのを待っていると、オレの横に誰かが並んだ。何となく顔を上げて見ると隣にいたのは見知ったヤツで、オレは軽く眉根を寄せる。

「そろそろ行くか」

エレベーターが来て扉が開くと、瀬川はオレを促しながら乗り込んだ。まるで示し合わせたようだけど、オレは帰ることを瀬川に告げていない。ただで一階のボタンを押した瀬川も帰る気は満々のようだ。目ざといヤツ。

「いいの？ あんたが抜けたらシラけるだろ」

合コンだけど、女は全員瀬川狙いだった。場慣れしている瀬川がそのことに気付いていないはずもない。けどヤツは合コンに微塵の未練もなさそうに、あっさりと頷いて見せた。女の子が好みじゃなかったのかオレに気を遣ったのかは知らないが、どっちでもどうでもいい。

「高野、まだ飲めるか？」

瀬川は平然と尋ねてきたけど、教え子の高校生に酒を勧める担任教師っていうのはどうなんだ？ 学校にバレたら教員免許剥奪ものだな。

「それとも、もう限界か？」

いやらしい笑みを口元に浮かべながら、瀬川はオレに視線を流し続ける。はいはい、オレを挑発したいわけね。どうせ明日も休みだし、もう少しくらい付き合ってやるか。

「あれしきの酒でオレが酔ってるとでも思ってたんの？」

「そうだな。黙りこくってサワーをチビチビやってただけだもんなん？」

……今のはちょっとムカツときた。バーボンやウイスキーをストリートで飲まなきゃ酒じゃないとでも？ なら、キツイ酒を美味しくいただける店に連れてってもらおうじゃないか。高くついても知らないからな。

カラオケを出た後、瀬川が次に向かったのはショットバーだった。クラシックが控えめに流れる店内は照明が抑えられていて、いい感じに味がある。カラオケみたいな大衆向けの場合じゃないから客もスーツ姿の人が多い。オレも瀬川もチャライ格好をしてたからこういう店では浮くんじやないかと思ったが、ジャケットを一枚着るだけで店に馴染む姿になれた。瀬川に服を買ってもらった時、夏真っ盛りなのに何でジャケットが必要なのかと思っていたんだが、これを見越しての買い物だったってことか。瀬川は一体、どれだけ先を読んで行動しているんだろう。そう思うと少し興味が沸いて、さっきまでの退屈も和らいできていた。

「悪かったな。あそこまで幼稚な空気になるとは思わなかったんだ」
カウンター席に並んで腰を落着けるなり、瀬川はそんなことを言った。合コンのメンツがどういう知り合いなのか知らないけど、あの雰囲気は瀬川にとっても目論みどおりじゃなかったってことか。そんなことを言ってるわりには、楽しそうにしてたけどな。

「まさか、あれが『大人の楽しみ』だなんて言わないよな？」

「言わないさ。あれは十代の楽しみ方だ」

オレの皮肉に苦笑いで答え、瀬川はグラスを傾けた。そのグラスが再びカウンターに置かれると、氷がカランと小さな音を立てる。グラスを置く姿が妙に様になっていて、オレは思わず隣に座っている瀬川を密かに観察してしまった。こうして見ると、瀬川って確かにカッコイイんだな。幼稚な雰囲気混じってさえないなければ、ちゃんと大人の男って感じで色気さえあるような気がする。こういう店が似合う瀬川と、ガキっぽい合コンで楽しんだ瀬川、どっちがヤツの素顔なんだろう。

「この店、いいだろう？」

オレを見ることもなく、瀬川は酒瓶が並んでいる棚を見つめなが

ら口火を切った。どこかで注文があったようで、カウンターの向こうではバーテンダーがシェーカーを振っている。久しぶりに聞くその音が、耳に心地よかった。

「そうだな。こういう雰囲気は嫌いじゃない」

ガキっぽい遊びには飽きたけど、こういう雰囲気はたまになら楽しめる。また年齢誤魔化してバーでバイトでもするかな。毎日だと飽きそうだから、週一くらいで。

「なんだ、こういう店にも入ったことがあったのか」

そんなことを言っているとところを見ると、瀬川はオレにバーを初体験させたかったらしい。初めてバーに行った時は確かに、それまで見たことのなかった大人の雰囲気が新鮮だった。ただどのめりこむのは、何事も初めのうちだけなんだ。ある一定の時間が過ぎると最初はどんなに楽しかったことでも次第に飽きがくる。

「これが『大人の楽しみ』だって言うなら、それは理解出来るよ。だけど別に、こういう店で静かに酒を飲むなんて大人じゃなくなつて出来るだろ？ この雰囲気は嫌いじゃないけど、楽しいって思えるほどじゃないね」

「高野が今までどんな人生を歩んできたのか、是非とも聞かせてもらいたくなるような問題発言だな」

歳のわりに冷めすぎだと、瀬川は小声で囁いた。オレのたった十六年の人生なんて大したもんじゃない。十も年下の奴にそんなこと言うくらいだから、瀬川は順風満帆な人生を歩んできたのだろう。でもそのわりには裏の顔があったりと、屈折してるけどな。

「そういう瀬川はどんな人生を歩んできたわけ？ オレ、そっちの方が楽しそうだと思う」

「……聞きたいのか？」

「辛気臭くなるような話なら聞きたくないね」

「どっちだ」

呆れたように言った後、瀬川は眉根を寄せながらオレから視線を外した。氷だけになったグラスを弄んでいるところを見ると、何か

を考えているらしい。オレを指導するつもりが逆に手玉に取られて、どうしていいのか解らなくなったのかもしれないな。そんなんでオレに意見しようなんて、甘いよ。

「瀬川の言う『大人の楽しみ』ってやつも教えてもらったし、そろそろ帰るわ。ごちそうさん」

融けた氷でだいぶ薄まったウイスキーを一息に干して、オレは席を立った。今日の『特別指導』とやらで目新しいことは何もなかったけど、腹が満たされただけでも良しとしてやろう。

「高野」

立ち上がったところで呼び止められたので瀬川を振り返る。まだ飲んで行くつもりなのか、瀬川はカウンターに座ったまま言葉を次いだ。

「来週は高野の家の前で待ち合わせだ。時間は午前六時。寝坊したら起きるまでインターホンを鳴らすからな」

一方的に言い放ち、瀬川はオレに背を向けた。まだこんなチャチな指導とやらを続けるつもりなのか。それに午前六時って、待ち合わせとしては早すぎじゃないか？

初回にしてすでに飽きていたが、オレは明確な返事をせずに店を出た。オレが返事をしなかったことにより瀬川が来なかったら、それもよし。不確かな約束を遵守するっていうなら、もう一度くらい付き合ってやる。

八月に入って二週目の日曜日、自宅マンションの外で車が停止した音を聞いてオレは窓辺に寄った。カーテンを開けてみると、マンションの下に一台の車が停まっているのが見えた。時刻は午前五時五十分。夏の爽やかな夜明けに不釣り合いな黒のボディから姿を覗かせたのはラフな格好をした長身の男。……本当に来たのか。

まだ母親が帰って来る前の時間帯だから家にはオレしかないが、本当にインターホンを連打されたらたまらない。仕方がなく、オレは戸締りを確認してからすみやかに家を出た。玄関の扉に寄りかかりながら待っていると、やがてエレベーターホールの方から人影がやって来る。そいつは玄関先に佇むオレを見て爽やかな笑みを寄越してきた。

「おはよう、高野。早いな」

今日はちゃんと『先生』の調子で、瀬川はそう言った。早いなって、あんたがこんな時間を指定したんじゃないか。

「じゃあ、さっそく出かけるぞ」

「車で？」

「なんだ、見てたのか」

「ずいぶん高級そうな車持ってるじゃん。どこの高給取りだよ」

オレが肩を竦めながら嫌味っぽく言うのと瀬川は含み笑いをした。

否定しないということは、瀬川は高給取りなんだろう。けど、収入が安定した公務員とはいえ二十六の高校教師が高級車を乗り回せるほど稼いでいるとは思えない。やっぱり、瀬川には何かがあるんだな。

マンションを出て車に乗り込むと瀬川はすぐに発進させた。マニュアルタイプの黒いスポーツカーは明け方の道路を泳ぐように進み、どどん街から遠ざかっていく。どこか目的地があるのか、それともただのドライブなのか。瀬川は明かそうとしなかったし、オレも

聞かなかったから、今日の『指導』がどんなものになるのかはまだ分からない。

運転してる方は楽しいかもしれないけど、ただ助手席に座ってるのは退屈なんだよな。流れる景色を眺めているのにも飽きてきたので、オレはシャツのポケットからタバコを取り出した。

「吸っていい？」

車好きなヤツは車内に臭いが残るからと、タバコを吸われることを嫌がる傾向にある。それ以前に、瀬川は教師だ。酒は勧めてもタバコはやめろと言われるかもしれないと思ったが、ヤツは意外なほどアツサリ頷いて見せた。それを真に受けてタバコに火をつけたオレが言うのもなんだけど、それでいいのか瀬川。

「ポイ捨てはやめろよ？　ちゃんと灰皿を使え」

そう言つて、瀬川は自ら灰皿を引き出した。タバコのポイ捨ては確かにマナーが悪いが、注意するところを間違っているような気がする。ま、注意されたところで聞く気もないけど。

「瀬川はタバコ、吸うの？」

「常習的にはではないが、吸うこともある」

「へえ。それは意外。ガツコの奴らが知ったら驚くんじゃない？」

「二十歳を越えているから、俺の場合はやましいことではない」

それは暗に、オレがやましいと言っているのだろうか。やましいなんて気分になれたらな、隠れてタバコを吸うのも楽しいかもしれない。だけど酒と同じで、そういうスリルは常習の前にかき消されてしまったんだ。それでタバコを吸う必要もなくなったから、こうして煙を吐き出すのは久しぶりのことだった。

「高野はいつから吸っているんだ？」

「オレ？　そうだなあ……小五くらいからだったかな」

そのくらいの頃、母親が吸ってたタバコをくすねて試しに吸ってみた。たぶん、あれが始まりだ。母親に見付かったら怒られるかもしれないというスリルが楽しくて、それから度々盗みを実行した。だけどオレの母親は、オレがタバコを吸ってる現場を目撃しても怒

らなかった。自分もそのくらいの頃には吸っていたからとアツサリ流されて、それでひどく興醒めたのは今でも覚えてる。

「つまんねーよなあ。酒もタバコも」

「なら、こういう楽しみはどうだ？」

オレにそう言い置いて、瀬川は信号が青に変わると車を急発進させた。もうすでに峠道に差し掛かっていたんだが、うねっている道をドリフトしながら上って行く。おいおい、ずいぶんとアクティブな運転をするんだな。急にGをかけられたもんだから、舌噛みそうになっちまった。

一時だけ走り屋っぽい運転をした後、瀬川は速度を落とした。後続車もないのでのんびりと車を走らせながら、呑気な調子で話しかけてくる。

「運転免許を取れば、こういった楽しみ方も出来る。年齢的に大人にならなければ出来ないことなど山ほどあるんだぞ」

あー、なるほど。そういう説法を聞かせたいがためにオレを車に乗せたのか。瀬川はまだ、オレのことを過大に子供扱いしてるんだな。

「確かにさ、日常生活の中で横Gを味わえるのは車か単車くらいなもんだよな」

「……その口ぶりからすると、無免許運転もやったんだな？」

「昔ね」

「まだ昔を語れるほど年齢を重ねてもいないだろう。高野は一体、どんな生活をしてきたんだ」

運転してるから振り向けないでいるけど、瀬川はオレに興味津々みたいだ。でも別に、オレの人生なんて大したことない。オレなんかよりずっと壮絶な人生を送ってきたヤツなんて、それこそ山のようにいるから。

「一応、クスリと鑑別所は経験ないよ」

「それ以外の悪事は大体やった、ということだな？」

「まあ、そう受け取っても構わないけど」

中学の頃は実際、法律で禁止されてるようなことも色々やったからな。法律で禁止されていることってというのは、全員がそれをやったら社会が破綻するから禁止なんだ。だけど抑圧されればされるほど、頑なに拒まれれば拒まれるほど、禁止されていることをやりたくなるのが人間ってもんだよな。オレの場合は犯罪に手を染めて甘い汁をすするというよりは、刹那のスリルが快樂だったんだけど。でもそれも、もう飽きた。

若いうちに色々なことを経験しすぎると、大人になってからの楽しみは絶対的に減るよな。酒もタバコも夜遊びも、大人になってから始めればよかったと今は後悔してる。オレの人生にはこの先、どんな楽しみが残されているだろう。そういった話を無感動にしてやると、瀬川は閉口したまま口を開かなかった。

しばらく山道を走った後、瀬川の車は展望台で停止した。山の空気が澄んでいて、八月だつていうのに朝は肌寒い。展望台からは街並みが見えるが、あれはオレたちが住んでいる街じゃない。二時間もドライブすれば、ずいぶんと遠くへ来た気分になるな。

「どうだ？　気持ちいいだろう？」

「そうだね。タバコが美味しいよ」

車を降りて隣へやって来た瀬川は、さっそくタバコに火をつけたオレを見て呆れた顔をした。空気が美味しいと煙も美味しい。こんな何もない場所で他にどんな楽しみを見出せていうのか聞かせてもらいたいね。

瀬川が一本くれと言い出したので、オレはタバコのケースを差し出した。オレのライターを使ってタバコに火をつけ、瀬川はゆっくりと煙を吐いている。学校でタバコ吸ってる姿なんて見たことないから新鮮だ。瀬川の素顔を垣間見たような気になったけど、それも一面にしか過ぎないだろう。こいつにはまだ、オレの知らない顔があるはずだ。

「さっきの話だが」

タバコを片手にしたまま瀬川が口火を切った。だけどヤツはオレの方を向いていなくて、遠くの景色に目を据えている。オレも瀬川から視線を外し、模型みたいに小さな街並みを見ながら話に応じた。「どの話？」

「この先に楽しみが残されているかという話だ」

「ああ……その話ね。何かありそう？」

「結婚して、子供の父親になるといふのはどうだ？　こればかりはさすがに、高野でも未経験だろう？」

瀬川がなかなか面白いことを言い出すから吹いてしまった。それ、オレが経験済みだつて言ったらどうする気なんだ？　まあ結婚

は、年齢的にまだ出来ないけどな。

「瀬川って独身だろ？」

オレが問い返すと瀬川は眉根を寄せながら顔を傾けてきた。その表情に微かな困惑を見て取って、オレは嗤う。

「自分が知らないことを楽しいかもしれないなんて言ったところで説得力ないよ。結婚するのも父親になるのも、オレには楽しそうだとは思えないね」

「……ひねたガキだな」

口調を一変させた瀬川は苦笑いを零し、タバコを地に落として靴底で火を消した。そうそう、そうやって言葉を選ばない方がよっぽど説得力がある。

「ガキはガキらしく色恋沙汰にでも現を抜かしていればいい。学校での様子を見る限り彼女もいないようだし、女でも抱いてみたらどうだ？」

モテないわけじゃないんだろうと、瀬川は皮肉っぽく言った。ヤツの言う通り、確かにオレは独り身だがモテていないわけじゃない。まあ、女子に大人気のあんたには劣るだろうけどな。

「そういう瀬川こそ早く結婚すれば？ 相手がいないわけじゃないんだろ？」

「俺のことはどうでもいい。今は高野の話をしているんだ」

「はいはい。でもオレさ、女遊びもとつくに飽きちゃってるんだよね」

同年代、年下、年上、一通り付き合ってみたけど、どれも長続きしなかった。一番長く付き合ってたのは人妻の五ヶ月だな。あれは旦那にバレるかもしれないっていうスリルが楽しかった。まあ今はもう、人妻とも遊ぶ気ないけど。

「景色見てるのも飽きた。そろそろ帰らせてくれよ」

瀬川にそう言い置き、タバコを捨てて車の方へ歩き出す。けど助手席のドアを開けようとしたら、後ろから伸びてきた手に制された。

「……何だよ？」

眉根を寄せながら振り返ったら殊のほか瀬川が近かった。オレより背が高い瀬川は少し身を屈めて、上からオレを見下ろしている。車のドアに突いた瀬川の手もそのままだし、傍目から見ると迫られてみたいんじゃないか？

「高野、世の中にはまだお前の知らない楽しみというものがある」

真顔のまま、瀬川はそう言って話を切り出した。またその話か。でもそれ、別にこんなに近くで言うことでもないだろう。

「オレの知らない楽しみって何？ もったいぶってないで教えてよ」
「センサーなんだからさと言うと、瀬川は笑みを浮かべた。その笑みは教室で見せるような爽やかなものじゃなくて、何か含みを持たせている陰湿なものだ。蔭のある表情をするヤツなんて珍しくもないけど、端正な顔をしている瀬川がやると得体の知れない迫力がある。危険な香りが漂っていて、ちよつと面白いじゃん。」

「異性遍歴は豊富なようだが、同性とキスをしたことはあるか？」
「はあ？」

瀬川が妙な言い出すから素っ頓狂な声を上げてしまった。それはつまり、男とキスしたことあるかってことだろう？ そんなもん、あるわけじゃないか。

「なに、とち狂ったこと言ってるの？」

「その反応から察するに、ないんだな？」

「あるわけないだろ。気持ちわりー」

「経験もないくせに決め付けるとは、ずいぶんと幼稚な発想だな。そういう発言は説得力に欠けるんじゃないか？」

ぐっ……ムカツク。嫌味ったらしく微笑んでいる瀬川が言ってるのは、さっきオレが言った科白だ。分かったよ、経験してから否定すればいいんだろ。

「どうせ来週も特別指導とやらをやるんだろ？ それまでに経験してきてやる。それから改めて気持ち悪かったって言うてやるよ」

勢いでそんなこと言っちゃったけど、さて、どうするか。女の子

とキスするくらいだったならその辺でナンパすればいいけど、さすがに男はナンパ出来ないよな。そんなことを考え出していたら、瀬川がオレの顎をついつと持ち上げた。

「そんな手間をかけずとも、今経験させてやる」

「……は？」

瀬川と？ それは…… なんと云うか、後に禍根を残しそうだ。

オレが困惑しているうちに、瀬川は空いている方の手でオレの手をすくい取った。その手はオレの胸の高さまで持ち上げられ、恋人同士がするみたいに指が絡み合う。体勢から察するに、オレが受け身なのか。いつもは迫る側だから、こういう時にどうしたらいいのかわからない。

オレがキスを迫る時、女はいつもどうしていたっけ？ キスする時ってそんなことを見てる時間的余裕があったか？ 顔を近づけたら唇が触れるというだけで、キスなんて一瞬の出来事だ。その後性情事が続く場合は、除いて。

「目は閉じるな。俺を見ている」

少しずつ距離を縮めてくる瀬川がオレの顔を片手で固定させながら言う。そうか、目を閉じればよかったのか。だがすでに、それは瀬川に禁止されてしまっている。見ていられると言われても、どう見てもいいんだ。

絡んでいる指に力がこめられて、不意の動作に反応した心臓が高鳴った。うわあ、オレ、ドキドキしてるのか。初めてのキスの時だってこんな気分にはならなかったのに。瀬川のシャツや髪から香ってくるタバコの匂いが頭をおかしくさせそうだ。

早く済ませてくれという願いも空しく、瀬川はなかなか唇を重ねてくれなかった。じつくりと時間をかけて捕らえた獲物を圧殺する蛇のように、少しずつ少しずつ迫ってくる。吐息がかかるほど顔が近付いているのに、寸止め状態は生殺しだ。息をするのも耐えかねて、オレは思わず呼吸を止めてしまった。動悸と酸欠で死にそうだ。

瀬川の瞳に映るオレが、息苦しさに喘いでいる。眩暈がひどくな

って自分の顔すら歪んで見え出した頃、唇に柔らかいものが触れた。それは後に続く情欲を予感させるようなものじゃなく、本当に触れるだけのキスだった。だけどそんな軽いキスに、オレは腰砕けになっ
てしまった。

「大丈夫か、高野？」

助手席のドアに背中を滑らせながら崩れ落ちたオレを、至って冷静な瀬川が引き上げる。あ、アホか。ただ一回のキスのためにどんだけ時間かけるんだよ。危うく酸欠で死にそうになったじゃねえか。オレを自力で立たせた後、瀬川はすぐ教師の顔に戻って「そろそろ帰るか」などと言い出した。同性との初めてのキスに、感想を求められなかったのは幸いだ。たかがキスだと思っていたものがこんなにいいものだったなんて、オレは今まで知らなかったのだから。

八月に入って二週目の日曜、オレは担任教師である瀬川と久しぶりのキスをした。一応断っておくと瀬川とキスをしたのが久しぶりなのではなく、ディープじゃないキスをしたのが久しぶりだったということだ。いや、それ以前に、キス自体も久々だったかもしれない。ソフトなキスも舌を絡ませるディープなキスもし飽きていて、このところキス自体をしたいと思わなかったからな。だけどオレは、瀬川とのキスで目覚めてしまった。あれからずっと、したくてたまらない。

「どうした、高野？」

人込みの中、オレの隣に佇んでいる瀬川が何気なく顔を傾けてきた。ちょうど目の高さが瀬川の口元だから、オレの目はそこに釘付けた。この形のいい唇で、ヤツはオレの唇を奪ったわけだ。今日の瀬川からはタバコの匂いがしないが、キスの余韻のようにまだ香っている気がしてならなかった。

「高野？」

ヤツの唇がオレの名前の形に動く。呼ばれていることに気がついて、オレはハッとした。

「何か言ったか？」

「呆けているから、どうしたのかと訊いただけだ」

涼しい顔をしている瀬川は、今日は『教師』の顔をしている。先週、帰りの車内でもそうだったんだが、瀬川はもうオレとキスしたことなんて記憶から消し去っているんじゃないかと思うくらいアッサリしていた。

あまりにも瀬川の顔を凝視していたことに思い至って、オレは視線を泳がせた。顔を正面に戻すとそこには、異様に広い空間がある。芝やダートのコースがあるここは、紛れもなく競馬場だ。八月第三週の特別指導は土曜にするって言うから何かと思えば、こういうこ

とだった。馬券を買うには成人していないとダメだから、これも大人の楽しみと言えば大人の楽しみなんだよな。

「一応、ギャンブル遍歴を聞いておこうか？」

オレが競馬場も初めてじゃないことをすでに察しているらしく、瀬川はそんな質問を投げかけてきた。ギャンブル遍歴か……昔、色々やったな。

「競馬、競輪、競艇、パチンコ、パチスロ、麻雀、賭け将棋に賭け暮。あとはトランプとか花札とかチェスとか、まあ、一通りやったな」

「将棋や囲碁もか。それだけのルールを覚えようという熱意がすごいな」

「基本的なルールを覚えただけだから詳しいことは知らない。大体が初めだけのめりこんで、すぐ飽きるから」

「高野は熱しやすく冷めやすいタイプなんだな」

「……そうだね」

ここは反論の余地がない。確かにオレは、熱しやすく冷めやすい。だからこそ色々経験しすぎて先行きがつまらなく思えてきてしまったんだ。けど今は、一つだけ熱中してしまいそうなことがある。

話をしているうちに出走の時間が迫ってきて、競馬場にファンフアーレが鳴り響いた。本日のメインである11Rのスタートだ。ファンフアーレが終わると競走馬が一気に走り出してきたが、オレは馬券を買っていないので興味は薄い。競馬は情報量がものを言うから、しばらく離れているとダメなんだよな。

盛り上がる観客の中に身を置きながら、オレは隣にいる瀬川を盗み見た。瀬川は顎に手を当てて考えこんでいるような格好のまま、芝のコースを注視している。瀬川は馬券を買っていたから、勝敗の行方が気になるのだろう。とは言っても、そんなに大層な金額をつぎ込んでいるとは思えないが。

口元にある瀬川の指を見つめていると、あの時のことを思い出す。あの指が絡んできたあたりからオレはおかしくなってしまった。男

相手にドキドキするなんて嘘だ。でもオレは、また瀬川とキスしたいと思っている。

レースが終わると瀬川はため息をついた。どんな予想を立てていたのか知らないけど、きつと外したんだな。

「そろそろ帰るか」

瀬川が顔を向けてきたのでオレは頷いて見せた。オレの返事を受けてすぐ、瀬川は踵を返す。まだ残っているレースがあるんだがメインレースは終わってしまったので、オレたちの他にも出口へ向かう人は大勢いた。こんな状況じゃ、瀬川にオレの願望を伝えることは出来ないな。女が相手なら人込みでキスしても構わないけど、相手が男だとさすがに人目が気になる。

「瀬川、来週は？」

今日は諦めることにして、別の話題を振った。しかし瀬川は、オレが思いも寄らなかつた科白で問いの答えとした。

「来週は課外授業があるからな、特別指導は今日で終わりだ」

「えっ……？」

「来週はもう夏休み最後の週だろう？ 新学期に向けて、そろそろ準備をしておけ」

競馬場という特殊な場所で聞くには、瀬川の言葉は不釣り合いなほど先生らしいものだった。オレは……ひどく、驚いていた。そんな風に驚いている自分にも驚きだ。

そうか……この特別指導とやらは夏休み限定の代物だったんだな。そしてその夏休みも、もう終わるんだ。新学期が始まれば、オレと瀬川は元の教師と生徒に戻るのだろう。無感動な瀬川の口調がそう、言っていた。

おかしいな。意味不明な特別指導なんて、嫌だったはずなのに。瀬川に付き合ってたのも、単なる暇つぶしくらいの気分だったはずなのに。それがどうして、こんなに重苦しい気持ちになるんだ？ 「課外授業、参加してみるか？」

瀬川に問われたけど、すぐには答えられなかった。いまさら、他

の生徒もいる課外授業に参加してもな。楽しいと感じられるとは思えない。

「まあ、気が向いたら来てみる。集合は午後一時。場所は光公園駅だ」

オレの返事を期待しない科白を一方的に放って、瀬川は閉口する。それから会話をすることもなく競馬場を出て、オレと瀬川は駅で別れた。

初めてのキスを経験したのは幼稚園の時だった。初めての相手こそ同い年の女の子だったものの当時からませていたオレはその後、幼稚園の先生達にも手を伸ばした。スカートめくりをする感覚と同じで、女の子達がやめると言いながらも嫌そうにしていけないという不思議な反応にはまっただ。童貞を卒業したのは中二の時だった。この時も確か、初めての相手は同い年の女の子だったような気がする。そして初めて知った快楽にはまり、キスの時と同じように誰彼構わず手を出していった。

キスもセックスも、今までは望めば望んだだけすることが出来た。タバコも酒も暴走行為もギャンブルも、やりたいと思った時にやってきた。何不自由なかったんだな、今思うと。だからこそ、すぐに飽きてしまったんだ。でも世の中には、望んでも手に入らないものがある。そのことをオレが知らなかったただけなのだと、瀬川の特別指導を通して教えられた。

「センサー、あつついよー」

八月最後の週末、光公園には私服姿のクラスメート達のうんざりした声が飛び交っていた。あちこちから漏れ聞こえてくる言葉は『暑い』の一点張りだ。それもそのはず、オレたちの頭上では灼熱の太陽が煌々と輝いている。地球外の巨大な火の玉に暖められた外気は脳みそが溶け出しそうに熱い。こんな日にわざわざ屋外を選んで課外授業をするなんて、正気の沙汰とは思えないな。だけどオレは結局、瀬川の課外授業に参加してしまっていた。

「この暑さが夏なんだぞ。不健康な冷房で体を冷やしてばかりいないで、時には夏を満喫してみるのもいいだろう？」

先生たちが子供の頃は学校に冷房なんてなかったんだぞと、生徒に囲まれている瀬川は持論を展開している。夏を満喫するなら海かプールで課外授業をやってくれと誰かが言い出し、周囲から賛同の

声が上がっていた。オレはその楽しげな様子を、少し離れた場所から眺めている。課外授業には参加してしまったものの、一生徒としてあの輪の中に入ろうという気にはなれなかった。

口々に暑さへの不満を零しながらも、生徒達はどこか楽しそうだ。体育でもなければ思い切り汗をかくこともないので、たまにしか味わえない感覚を楽しみ出しているのかもしれない。瀬川の口車に乗せられている、とも言えるが。

こうして生徒と接している瀬川を見てみると、ヤツは教師なのだと改めて思う。生徒に向ける爽やかな笑みは好意的に受け止められるだろうし、分け隔てのない生徒の扱いは模範的だ。オレがこの夏の間に垣間見た瀬川の素顔を、今のヤツから誰が想像するだろう。ヤツが実は口も素行も悪い不良教師であることを知っているのは、きつとオレだけだ。だがそれでも、オレは特別じゃない。

「高野、日陰にいたら公園に來た意味がない」

一人でいるオレを見て、陽だまりの中の瀬川が手招きをする。それは浮いている生徒を周囲に馴染ませるための『教師』としての発言であって、オレのことを思っている言葉じゃない。そう思ったら何もかもがどうでもよくなってきた。オレは素直に日陰を後にした。

課外授業が行われている光公園はよく住宅街にあるような遊具のある公園ではなく、大規模な自然公園だ。森林で囲まれた公園内には散策路が設けられていて、オレたちは瀬川を先頭に当てもなくブラブラしていた。自然の中をただ歩くだけなんて、退屈な授業だな。蝉はうるさいし、暑いし、無駄に疲れるし、来るんじゃない。オレがそう思い始めた頃には全員がバテていて、歩みを止めて小休止となった。ジャンケンで負けた二人が全員分の飲み物を買いに走り去って行く。これは、瀬川のオゴリだった。

「ねえ、先生。雲が出てきたよ？」

「ああ、本当だ」

よく冷えたお茶を喝いた体に流し込んでみると、瀬川と女子の会話が耳についた。空を見上げてみると確かに、怪しい色の雲が広が

つてきている。夏だし、一雨ありそうだな。

「センサー、そろそろ帰ろうよお」

雨に濡れたくないのか、女子の一人がそんなことを言い出した。その一言で帰るといふ流れになるのかと思っただら、瀬川は頷かないままでいる。

「先生は雨の楽しみ方も知っているぞ。これは先生だけの秘密なんだが、今日は特別に皆にも教えよう」

瀬川が不意に『秘密』という単語を持ち出したから、帰りかけていた生徒達は興味を引かれたように足を止めた。教えてという生徒の声に促され、瀬川はしたり顔で真意を明かし始める。

「よく、珍しいことが起こった時に『明日は槍が降るかもしれない』と言っただろう？ 雨風を厭わないという意味で『槍が降っても』をする』という言葉もある」

国語の教師らしく、瀬川は耳を傾けている生徒達に丁寧な説明をしている。瀬川はよく他人に聞かせる話をするためには道筋を立てることが重要だと言っているから、今話した部分は『触り』なのだろう。その後どんな内容が続くのかと考えを巡らせていたら、瀬川は突拍子もないことを言い出した。

「槍は降るものなんだ。これから降るであろう雨の一滴を、一本一本の槍だと思えばいい」

……触りの部分は興味をそそられるものだったが瀬川、その結論は意味不明だ。そう思ったのはオレだけじゃないようで、話に耳を傾けていた生徒達は全員ぽかんとしている。だが生徒達の反応は予想の範疇だったらしく、瀬川は表情を変えることなくさらなる説明を加えた。

「もちろん、実際に降るのは雨だ。雨に降られても濡れるだけで済むが、槍に当たれば命を失うかもしれない。雨に当たれば死ぬかもしれないと思っただら、雨から逃げるんだ。これはけっこうスリリングだぞ」

あー、はいはい。ものの例えを現実のものと思い込むことで、現

実では味わえない気分をバーチャルで楽しもうということか。：

…アホくさっ。

「……それ、面白そうだな」

誰かがそんなことを言い出したもんだからオレは耳を疑った。だけど呆気にとられたのはオレだけのようで、瀬川の口車に乗ったクラスメート達はすっかりその気になってしまったようだ。あちこちで、自分もやるという声が上がっている。本気か？

「よし、散るぞ。生徒諸君の生還を期待する」

軍人のような敬礼を生徒に向けて、瀬川は一目散に走り去って行った。生徒達も雨に怯えながら、方々に散って行く。オレは……ベ
ンチに座ったまま、しばらく動けないでいた。

頬に冷たいものが触れて、何かと指を伸ばしてみたら水滴だった。微量の水はすぐに蒸発して消えたが、暗雲が立ち込めた空からは大粒の雨が落ちてきている。すぐに本降りになりそうな曇天を仰ぎ見てから、オレはゆっくり立ち上がった。帰ろう。

瀬川の課外授業は楽しいと評判だったが、参加して損をした。あんなガキっぽい『ごっこ遊び』が楽しめるはずもなく、どちらかと言うとついていけない。何故、あんなことが楽しいんだ？ どうしてあんなことくらいで楽しめるんだ？ オレには、その神経が解らない。

のんびり遊歩道を歩いていたら滝のような夕立に襲われた。ただオレは、急ぐこともなく雨の中を歩いている。雨は槍になったりはしないし、打たれたくらいで死ぬはずもないからだ。濡れた髪やシャツが肌に張り付いて気持ち悪いが、ただそれだけのことだ。

夏の夕立は一時にザツと雨を降らせ、すぐに上がった。だが空はまだ厚い雲に覆われているから、もう一雨くらいあるのかもしれない。これだけ濡れた後では何度雨に降られようと同じことだが、よく考えてみたら今日は電車なんだよな。さすがにこの格好で電車に乗ることは出来ないから、どこかで服を乾かそう。雨上がりだが気温は高いままだし、太陽が顔を覗かせれば髪も服もすぐに乾くだろう。

「高野」

雨をしのげそうな場所を探して歩いていると、不意に名前を呼ばれた。声のした方へ顔を傾けてみれば、そこには担任教師の姿が見える。緑の葉が雫を滴らせている大木の下で、瀬川がオレを呼んでいた。

「雨宿りもしなかったのか」

濡鼠のオレを見て、瀬川は訝しそくに眉根を寄せる。そんなこと

を言う瀬川は、この大木の下で雨宿りをしていたのだろうか。青々と茂っている葉は思いのほか雨を防げるものらしく、瀬川はあまり濡れていなかった。皮肉な気分で、オレは口元を歪める。

「雨に打たれても死ぬわけじゃないからな」

「……退屈そうだな」

「ああ、退屈だね。今も、これから先も、きっと退屈だ」

自分で考えていたよりも、オレの口調はきつかった。課外授業を全否定した形になったから瀬川も閉口する。オレに愛想を尽かして、瀬川なんかどこかへ行ってしまうがいい。そうすればオレも、瀬川のことなんかどうでもよくなるはずだ。だけどいつまで経っても瀬川は立ち去ることなく、オレの隣にいた。

「……高野」

しばらくの沈黙の後、瀬川の方から口火を切った。オレは瀬川を振り返ることもなく、短く反応を返す。瀬川がどんな顔をしているのかは分からなかったが、ヤツは淡々と言葉を続けた。

「目を閉じてみる」

「……何で？」

「新しい世界を高野に見せるためだ」

瀬川が意味不明なことを口走るから、オレは思わず眉根を寄せながら振り向いてしまった。瀬川は真顔のまま、じっとオレを見ている。まるで、オレが言いつけに従うのを待っているかのような。

新しい世界、何とも胡散臭い響きだ。目を閉じただけで世界が変わるのなら、誰も好き好んで苦労なんかしない。世の中には苦労をしているヤツなんて山ほどいる。だから瀬川の言葉は嘘なんだ。

「次に目を開けた時、高野の世界は確実に変わっているはずだ。俺が保証する」

確実にとか保証するとか、どこからそんな根拠のない自信が湧いてくるんだ。そこまで言い切るのなら従ってやってもいいが、目を開けても世界が変わっていなかったらどう責任を取ってくれる？ オレがそう尋ねても、瀬川はけろりとした顔で答えを口にした。

「何も変わっていなかったら、何でも言うことをきいてやろう」

「じゃあ、オレが教師やめろって言ったら聞いてくれんのかよ？」

軽々しく『何でも』とか言うから、ついムキになってしまった。

この条件だったら絶対に怯むだろうと思っていたのに、瀬川はアッサリと頷いて見せる。こいつ、正気か？ いいよ、そこまで言うなら新しい世界とやらを見せてもらおうじゃないか。

目を閉じると湿った土のにおいが鼻についた。夏に特有の、雨上がりのにおいだ。どこか遠くで蝉が鳴いている。この鳴き声はツクツクボウシか？ この蝉の声が聞こえてくるようになると思われんのだよな。そんなことを考えていたら不意に、唇に何かが触れた。驚いて目を開けたら、オレの視界を占めていたのは瀬川の端正な顔だった。初めてキスした時と同じように、瀬川の瞳に映ったオレが困惑顔をしている。うろたえてる自分の姿なんて、見せるなよ。こんな時にキスしてくるなんてどうという神経してんだ。

「高野、空を見てみる」

そう言って、瀬川はオレの前から体を退けた。わけが分からないまま、オレは言われた通りにしてみる。すると空は、オレが予想もしていなかった様相を呈していた。厚い雲の切れ間から注ぐ筋状の光が、この世のものとは思えないくらいキレイだ。

「雲間から洩れる太陽の光芒を、天使の階きざしという。珍しい光景ではないんだがこうして改めて見ると、きれいだろう？」

解説を加えている瀬川に返事をするのも忘れるほど、オレは空に見入っていた。空がこんなにキレイなものだったなんて、知らなかった。この現実離れた光景が珍しくないなんて嘘だ。

「光に照らされて煌めく雨の雫、その雫を乗せて輝く青々とした葉、天使が舞い降りて来そうな空。世界は、美しい。そのことを知っているだけで、ずいぶんと世界が変わると思わないか？」

どんなに美しい情景も、毎日のように眺めていれば必ず見飽きる。それは美しさが日常に取り込まれてしまうことで目新しさを失ってしまうからだ。だがそれでも、美しさ自体が損なわれるわけではな

い。見慣れた日常の光景も少し視点を变えるだけで新鮮に思えるものなのだと、瀬川は言った。

「キス一つとってみても、それは同じだ」

そう言つて、瀬川はオレに顔を近づけてきた。空を映していたオレの視界が、再び瀬川で占められる。そのキスを受け入れたくて、オレは自然と目を閉じた。

要は、気持ちなんだ。全ては自分の心持ち一つで変わつて行く。

くだらないと思う『ごっこ遊び』も最初からアホくさいと思わず真剣にやってみれば案外に楽しめるかもしれないし、やり飽きたと思つていたキスも、その時々感情が違えば常に新鮮なものになる。すげえよ、瀬川。あんた、やっぱり教師なんだな。

「人生は楽しいぞ。だから腐つてないで青春を謳歌しろ」

体を離れた後、瀬川は教室で見せるような爽やかな笑みを浮かべ、素の口調でそんなことを言つてのけた。ひよつとしてこの課外授業も特別指導の一環……だったりののか？ もしそうならば、オレはまんまと嵌められたわけだ。まあ気分いいから、別にいいけど。

「せがわー」

「先生と呼べ」

「センチー、キスしたい」

一度目のキスはときめきを、二度目のキスは衝撃を、三度目のキスはオレに不思議な心地よさをもたらした。次に瀬川とキスしたら、今度はどんな感情が与えられるだろう。オレはそれを知りたかつたんだけど瀬川は何を思つたのか、ニヤリと嫌な笑みを浮かべて見せる。

「はまつたか？ でもダメだ」

「えー？ 何でだよ。さつきはそっちからしてきたじゃん」

「高野は熱しやすく冷めやすいんだろう？」

それはつまり、オレを飽きさせないために焦らすということか？ というか、何でそんな必要があるんだ？ オレを焦らしてどうしようっていうんだよ、瀬川。

「雨も上がったことだし、そろそろ解散にしよう。その前に、散った生徒を呼び戻さないといけないな」

反応を返せないでいるオレを置き去りにして、急に教師の顔に戻った瀬川はさつさと歩き出した。人間っていうものはどうして、禁止されればされるほど燃えるんだろう。計算高い瀬川が恨めしく思えるほどに、オレは瀬川にのめりこみ始めているみたいだ。その証拠に、瀬川とキスしたくてたまらない。

「いたいけな青少年に禁欲を強いるなんて鬼畜だろ」

届かない独り言を瀬川の背に投げつけてから、オレは仕方なくヤツの後を追った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8870/>

革命キス

2010年10月8日14時23分発行